

家族の温かさ

岐阜市立梅林中学校 3年

細野 惺央(ほその せな)

「ありがとう」。この言葉はとても深いと感じます。日常のなかで「ありがとう」と言える場面は多いです。しかし実際に「ありがとう」と言葉を発する機会は少なく、特に父や母に面と向かって「ありがとう」ということは少ないです。助けてもらう事が当たり前だと感じていませんか、私もそう感じていました。

私の家は4人家族でした。父、母、姉、そして私です。両親共働きで、父は仕事の関係で別居していました。父も母も忙しいながら、私のことをよく構ってくれました。そんな父は、私が小学4年生になったタイミングで、仕事中に突然倒れ、帰らぬ人となりました。当時の私は状況が理解できず、一日中泣いており、立ち直るのにも数日かかりました。父は生前よく、「生きられていることに感謝をしなさい。」と言っていました。私はまだ小さかったので、意味がわかりませんでした。父が亡くなった時に、もう父には会えないし、話せないと分かりました。そして「生きられていること」この言葉の意味を身に染みて感じました。

父が亡くなってからの母は、母子家庭として今まで以上に働き、私や姉に不便のないようにしてくれました。母が仕事を終えて帰ってくるのは夜の2時や3時の時もありました。それでも、朝6時には起き、お弁当や家事をしてくれました。私が中学校に入学し月日が流れるにつれ思春期になります。母親が頑張っていることは理解していました、「洗濯を干しといて。」や「ちゃんと勉強しているの？」という言葉にも苛立ち、次第に無視をするようになりました。それでも母は、心配してくれて声をかけてくれました。私はそんな優しさに気付けず、ついに母に対して「鬱陶しいんだよ!喋りかけんな!」ときつく言ってしまいました。そこから1週間くらいは、母との会話はありませんでした。

そんな日が続いていた夜、急に目が覚め水を飲もうとしてリビングに向かうと、机の端に紙が置いてありました。何の紙か気になり開いてみると、母の字が紙いっぱいに書かれていました。内容は「子供に悪い思いをさせてしまった。どうすればいいのか」という気持ちと、解決策などが書かれており、紙が一部濡れています。何が紙を濡らしたのかは言わずとも分かりました。なぜ母に悲しい思いをさせてしまったのか、なぜあんなにも強く言ってしまったのか、その瞬間心が締めつけられるような思いになり、罪悪感でいっぱいでした。母は父が死んでから一番頑張っており、そんな中でも、私に対して親身になってくれているのに、その思いを感じられない自分は、とても恥ずかしく、そんな自分がとても嫌になりました。次の日の朝、母が起きると、きつく言ってしまったことの謝罪と普段の感謝を伝えました。「お母さん、この前はきつく言ってしまい、辛い思いをさせて本当にごめんなさい。そしていつも、忙しい中家事をしてくれたり相談に乗ってくれたり、本当にありがとうございます。」私は数年ぶりに母に対して「ありがとう」と言いました。それを聞いた母は私を抱きしめて、「私も頑張るから、お互いに助け合おうね。」と言いました。母の優しさをとても身に感じました。

「ありがとう」を言わなければこの体験をする事はありませんでした。当たり前の生活は誰かが支えてくれているからあるものです。「ありがとう」というたった5文字しかない文字に、どれだけの価値を感じられるかだと私は思います。日々生活する中で「ありがとう」という言葉が色々なところから聞こえてくる、そんな世の中にしたいです。また、今生きれていることに、全員が感謝ができるような世の中にもしたいです。お父さん、お母さん、こう思わせててくれて「ありがとう」。